

あかつき

第38回上林暁文学館企画展

「上林暁とは…」作家との書簡交流から暁の人間像を見る

ところが、その十日過ぎを待っていると、次のような葉書をいただいた。

「前略 先日十日過ぎに御来宅下さる

やう御返事を差し上げましたが、その後

仕事が遅々として捗らず困つてみます。

就而、廿日頃まで延ばしていただきたく

勝手乍ら右何卒御諒承下さい。

先づは 取急ぎ右まで。草々」

十一月九日

その二十日頃を待っていると、またしても、十一月十八日付けで、つぎのような葉書をいただいた。三葉と墨書きであった。

「前略 先日、廿日頃お出下さるよう

お端書き差し上げましたが、まだ仕事

片付かずにいます。当分仕事に追われて

ゆつくりした暇がなささうだし、自分の

間見合はして下さいと有難いと思ひます。

何れ又機会もあることと思ひます。

勝手申して相済みませんが

不悪御諒承下さい。取急ぎ。草々」

がっかりしたことは言うまでもないが、作家というものは忙しいものだなと思つた。若いわたしには、ちよつぱり、上林さんは時間に対してケチだなあと恨むような気持ちもわいた。(後年になって、はじめて、上林暁の時間を奪おうとしたことに対して申し訳なく思うようになったが)

『上林暁全集』の年譜によれば、その翌年(昭和二十二年)の十月、上林暁は亡妻の遺骨を携えて帰郷し、埋葬を営み、郷里にしばらく滞在した。その折に、母校の中村高校から講演を依頼された。

上林暁からの葉書

くみ すみお
国見純生

一 上林暁との出会い

上林暁氏と近付きになったいきさつについて記したいと思う。なかなか簡単には会えなかつた。葉書を出し、返信には接したが、結局は訪問を断られるかたちになり、上林さんが母校の中村高校で講演されたとき、たまたま帰省していたわたしはその講演を聞き、そのあとでお会いできたのである。

上林暁は昭和二十一年五月に夫人を亡くされ、九月に第十一創作集『晩春日記』を出された。わたしは友人の太宰恒吉と語らつて上林家を訪問すべく、十月二十四日付けで、自分のほうから一方的に訪問希望を表明する葉書を書いた。十月二十五日付けで返信の葉書をいただいた。

「拝復、おハガキ拝見いたしました。

同郷の若い方からのお便りに接し大変うれしく思ひました。目下、新年の原

稿を一二書かねばなりませんので、仕事に没頭いたしたく来月の十日過ぎに

なると息がつけさうですから、その頃にご遠慮なくお出ください。小生は大

概うちに居ます。午後を選んで下さら

ば好都合です。何卒太宰氏も御同道下

さい。省線阿佐ヶ谷駅で降りて十分余

りのところへ。取急ぎ御返事迄。御勉強を祈り上げます。草々」

私小説作家上林暁とは、どのような人物であつたらう。今回は、幾人かの作家が上林とやりとりした書簡交流の文面から暁の人間像を見てみたい。

初回は、国見純生の「上林暁からの葉書」『上林暁研究』園田学園女子大学(吉村研究室)を読んで歌人である筆者との交流から暁の人間像を見る。この『上林暁研究』は発刊から20年の歳月が経過はしているが、新しい世代にも上林暁を知っていただくには格好の文献であるのでこの期にあらためて紹介した。

書簡の文面からその人の人間像を見ていくのは、読み手側の感情移入にも大きく依存されるので、必ずしもそれが真意とは限らないが、書簡交流を体験してきた作家たちの感想文を読みながら上林暁の真髓に迫っていただきたい。

また、上林は近代文学と現代文学の間で活躍してきて、芸術院賞や読売文学賞などを受賞しているその功績なども今後紹介し、上林文学の真価にも迫りたい。

上林は、病床生活を送りながら作家活動を続けたが、作品「悲観しない病者」(随筆集「随筆集幸徳秋水の甥」所載)では、次のように述べている。

私は中風で、もう十一年寝ついている。六十歳になつてから、一度も風呂に入らないし、一度も歩いたことがない。利くのは左手だけで、右手や両足は利かない。

幸に頭が呆けていないので、作家としての渡世ができています。おかげで、生活がかつかつにできています。おかげで、生活がかつかつにできています。おかげで、生活がかつかつにできています。おまけに芸術院会員としての年金がある。生活の不安はない。(後略)

そのとき、わたしもたまたま帰省して、上林暁の講演を聞くことができたのである。講演の内容は、中村市入田に堺事件にかかわった志士たちの墓があるが、森鷗外の小説に堺事件を扱ったものがある云々と、郷里の文学と歴史に関するものであった。高校生たちには、さほど興味をひかなかったようだ。上林暁の話は講演口調ではなく、訥々と語られたので、その含蓄は理解できないようであった。もちろん、わたしは熱心に聴き入ったのであるが。

講演後、上林暁に挨拶すると、人なつこい笑顔で迎えてくれた。何を話したか今となっては、思い出せないが、気さくで親しみやすいという印象を受けた。幸徳秋水の墓にお参りしたいと言われるので、ついて行った。

その年の十二月二十三日の「自由新聞」に上林暁の「幸徳秋水の墓」というエッセイが発表された。

それには、その日のことを克明に記載してくれている。

「私は裁判所の裏手を目当に、和歌を作る東大農学部学生と、文学と映画を好きな町の青年と一緒に行った。(中略)墓地に入り込むと、そこらは、町の旧家である木戸一族の墓が占めてゐた。

その中で一際目立つのは、木戸明といふ人の墓であった。木戸翁は明治の初め頃、この町に遊ん堂(義塾)といふ漢字の塾を開いて、秋水も少時その門に学んで、才学を揮んでゐたといふことを聞いてゐた。その塾の跡は、町の大明神の脇にあつて、この墓に来る途中、私達はその側を通つて来た。同行の大学生は、木戸翁の孫に当るといふことであつた。木戸翁が長寿を保つて死んだ時

私達は中学生で、その葬儀の同伴をしたことを覚えてゐる。」

このように書かれてある。「木戸翁の孫」というのは誤りで、「木戸翁の曾孫」が正しい。上林さんとは初対面であつたが、一緒に秋水の墓を詣でて、急速に親近感がわいた。

二 上林暁との交わり

(一)

その後、上林暁とのかたじけない交わりがはじまつた。手もとにある葉書の中から選んで日付け順に引用してみよう。

昭和二十六年一月二十日付けの年賀状。

「賀春 元旦」

早々に賀状をありがたく存しました。

旧臘

阿佐ヶ谷に現れたさうですね。

御精進祈り上げます。上林暁

「阿佐ヶ谷に現れた」というのは、上林さんの行きつけの飲み屋と噂のある飲み屋を訪ねたことを指すのであろう。つぎは、わたしが、結婚の挨拶状を差し上げたときの、ご返信で、昭和二十六年十一月十六日付けの葉書。

「拝呈御鄭重な結婚ご挨拶状あり

がたく存じました。御慶祝申上げます。御身辺のことは風のたよりに承つてゐました。又御心境は「花宴」の歌で偲んでゐました。この間の歌でまつぐな歌を作つてゆきたいとの作は大へん感心いたしました。心機一転、新生の喜びと共に御精進を祈り上げます。

取急ぎ御祝ひまで。

奥様にもよろしくお伝へ下さい。

敬具 十一月十六日

再婚したのであつた。「花宴」というのは北見志保子主宰の歌詩。発行所から月々お送りしていた。「まつぐな歌を作つてゆきたいの作」とは、どんな歌であつたか思い出せないが、かたじけないおこぼであつた。

つぎは、昭和二十七年三月十一日付けの葉書。

「拝復、お見舞状ありがたく戴きました。小生の病氣は漸次快方にて、左の下脚がしびれてゐるほかは別に故障はなく、まだ外出は叶ひませんが、このごろは火燧の中でなら読書をしてゐます。

ポツポツ原稿も書きたいと思つてゐます。「馬糞石」は小生も持つてゐます。終戦後二冊得て、一冊を友人にゆづり、一冊を持つてゐるのです、歌詩「花宴」を毎号もらつてゐるので貴兄の大体の消息も承知してゐます。帰郷してゐられたら幸いですねえ。御精進を祈ります。奥様にもよろしくお伝え下さい。草々」

「馬糞石」は、嘉西善蔵の小説集。わたしの郷里は、中村市有岡。つぎは、昭和二十七年七月二十七日付けの葉書。

「拝復、お端書ありがたく拝見いたしました。おかげ様にて小生も

段々元気になつてゐます。「花宴」毎号御惠贈いただいてゐます。一月号の由、慶賀申します。御申越の原稿は、まだ書けさうにありませんので御放免いただき度いと存じます。病後のからだにて暑さと闘ふだけで精一杯のところへ、小説の方に追はれてある現状、御諒承お願ひいたします。勝手に恐縮ですが、おわびまで。不一」

「御申越の原稿」というのは、「花宴」に何かエッセイを書いていただきたいというお願いで、北見志保子女史から依頼されてわたしがお伝えしてあつたことを指す。病後の、しかも忙しい上林さんに無理なことを申上げたものだと、いま読みながら、はらはらする思いである。

つぎは、昭和二十九年八月十三日付けのわたしの帰省先宛の葉書。

「暑中御見舞いありがたく存じ

ました。御帰省せられることは

「花宴」の消息で承知いたしてゐ

ました。そちらは暑いことせう

が、のんびりしてゐることでせう。

東京も毎日の炎暑です。七月二十

日前後に新調した傘が包装紙に包

まれたまま、一度もさされず傘立

てに立つてゐます。先日荻窪で東

声の正岡子規伝を買ひました。中

村高校に寄付するつもりです。

小生常に息災です。十三日朝

「荻窪」でというのは、「荻窪古書展

にて」である。

つぎは、昭和二十九年十一月九日付け

の葉書

「拝啓。先夜は「正」をありがた

く存じました。結滞は小生の謬りて

した。結滞にお出し下さい。

「化石のごとく」広告よろしく取り

付けておきました。右取急ぎ。

杉並区天沼二ノ三一九 上林暁

十一月八日

「正」というのは谷崎潤一郎の小説集。

わたしが進呈したのだつた。「結滞は、

わたしの第一歌集『化石のごとく』の序

文を買っていただいたが、その序文中の

ことば。「広告」というのは、土佐出身

の文人たちの出していた雑誌「南風」への

の広告。このように、いろいろとお世話

さまになつた。

つぎは、昭和三十年一月六日付けの年賀状。

「謹賀新年 元旦」

新しい御精進を祈ります。
旧臘はお二人でお訪ねいただき
多忙の際として失礼いたしました。
しかしあのころは一年のクライマックスだったやうな気がして忙しかつたことも、夜の寒かったことも、なつかしく思ひ出されます。

上林 暁

「お二人」というのは、わたしと妻の二人のことである。十二月二十日に出されたわたしの第一歌集『化石のごとく』に序文を書いていただいた御礼を携えて妻をはじめ伴ったのであった。上林さんは、われわれを喫茶店へ連れて行ってくださった。人見知りしない妻が、大作家を相手に、洋画の話を選んでいただくと思ひ出される。

つぎは、郵便スタンプのよごれのため年が不明であるが、昭和三十年になつてからのものと思われる。「八月五日」付けの葉書。

「御ぶさた致しました。御元氣の様子、何よりです。お送りいただいた高知新聞拝見いたしました。古書漁りの文章はどれを読んでも興味に惹き入れられます。珍しい土佐文献を集めてられることも判りました。小生も土佐に関するものを集めてみたい気持はありますが手が廻りかねてゐます。最近土佐の捕鯨に関する冊子を二冊求めました。これは窪津の捕鯨の話をお父から聞き書きするたの参考書です。高知へ帰つてゐられた由、小生は夏にはたうたう帰れませんでした。老父が病氣なので、今月中には帰つて来たると思つてゐます。田村松魚は是非研究して下さい。」

とあり、あて名書きの下には、

「最近料理の研究者で田村松魚といふ人の名を新聞雑誌で見かますが、これが松魚の息子ではないかと小生は睨んでいます。」

御自愛下さい。九月四日夜」

お送りした「高知新聞」の一つには、拙文の「東京で探る土佐文献」が載っていた。土佐の友人の文芸評論家、木戸昭平君の影響で、わたしは土佐文献に凝っていた。田村松魚は、宿毛市出身の文人田村俊子の夫だった人。松魚研究をしたいということをお話してあげたことだ。上林さんにお話してあげたことだ。上林さんにお話して、郷土文学の話に熱を上げたことだ。

(11)

ここから引用するのは、いずれも、左手の鉛筆書きの葉書。万年筆では書けなくなつた状態で、お便りを書いてくださったことを恐縮に感じる。

先ずは、昭和四十二年七月三十一日付けの葉書。

「御ハガキありがたう。」

毎日あついです。

全集はおそくなりましたが、

八月中旬に出来ると思ひます。

近況まで、左手にて

全集というのは、筑摩書房から出される「上林暁全集」。言外によるこびが滲み出ている。

つぎは、昭和四十三年八月二十三日付けの葉書。

「ごきげんのことと存じます。」

文学ヒのこと、協力ぞえありがたく存じました。御礼申し上げます。

私は次第に元氣ですが、まだ書けません。御自愛のほどに」

あて名欄に「八月二十三日」とある。「文学ヒ」というのは、中村市為松城跡のもの。

つぎに、昭和四十四年九月十二日付けの葉書。

「おたよりありがたう。」

ごきげんのやうです。ボクもまだ歩けません。だんだんゲンキです。今小説「ふるさと」をかいています。(新潮一月号)

九月四日

つぎは、昭和四十五年四月六日付けの葉書。

「先日失礼。」

「司牡丹の記」ありがたう。

次にずいひつ集を出すとき収録いたします。おん礼まで。

四月四日

「司牡丹の記」というのは、終戦直後に「月刊高知」に発表された上林暁の工ッセイである。何かの折に、それを所持していないと承つて、「コピー」をお送りしたのであった。

交通事情のわるいときに、編集部から託された司牡丹一本を携えて汽車にのつたのはわたしであり、これが暁への前渡し原稿料に相当するものだった。酒の自由な時代だったので、一本の酒を惜しみつつ、いろいろな人と酌み交わされるさまが克明に書かれていて、興味尽きない。

この随筆は、随筆集『幸徳秋水の甥』に収められている。

「去年の暮に『月刊高知』の編集部から『司牡丹』一本が届けられたのは嬉しかった。中村中学校の後輩である国見純生君が郷里に帰つていて、預て来てくれたのである。私は正月の楽しみに包装を

解くと、手を着けてしまいそんな心配があつたからである。」

「大晦日の晩に、初めて包装を解いた。その時分まだ同居していた義弟と二人で盃を手にして、最初の一杯を味つた。

酒には素人である義弟も『うまい』と言つた。かすかに粕の匂いがして、芳醇な香りは堪えられなかった。コクがあつて、盃を持つとねばねばする酒なんて、近來飲んだことがなかつた。」その翌々日には、知人の新年会に「司牡丹」を一合瓶に入れて携え、フランス文学者の青柳瑞穂氏らと飲んだ。越えて五日から六日にかけて、中野重治らと。小田原の下曾我に病を養っている尾崎一雄を訪ねた。水筒に一杯詰めて携えた「司牡丹」が、ここでも賞賛されたという。「神奈川県足柄下郡下曾我村というところで、遠い土佐の酒が賞美されるのを、私は面白く思つた。」こう書かれてあるのを読み、お役に立つてよかつたなあと感じる。

つぎは絵葉書で、消し印には「72」とあるから昭和四十七年で、二月二十九日付け。

「この間は、失礼。コピーを有りがとう。たいへん好意を持たた文章です。柿内はもうとつくにかえつたこととせう。またお出下さい。」

上林 暁

あて名欄の最後に、「二月二十五日」とある。

「文章」というのは拙文のこと。どんな文だったか、忘れたが、「たいへん好意を持たた文章」とは、かたじけないおことばであった。「柿内」とは、大方町田野浦在住であった歌人の柿内実氏。かれが上京する毎に、上林宅へ一緒におうかがいした。上林さんの将棋の相手をしていた姿が目につく。

つぎも絵葉書で、72年八月三十日付け。

「すてにお帰りのことよ。ふるさとの家のおたより有りがとう。ボクの生家のまへを通られた由、うれしく存じました。お大事に。」

上林 生

あて名欄の最後に、「八月廿日」とある。

三 拙歌を評された葉書二通

郷土出身作家の上林暁にはたびたびお便りいただいたが、忘れられないのは、わたしが子供の難病について詠んだ歌に対して、激励のお葉書をくださったことである。「短歌研究」四十四年七月号に「風のごとく」三十首を発表したとき、（これらは、のちに歌集『日さかりの道』に収録された）そのコピーをお送りした。

鴉鳴くことが恐いと連れ立てる子が言ふ
鴉電線に鳴く

病院の待合室に坐れる子がすかに風のごとく泣きをり

病院に汝を入れ父はうつつけ氷雨ふる砂利の道帰るぞも

これらの歌を作ることで、わたしは内面の遣り場のない悲しみを吐露し、切羽詰まった訴えをしたつもりだった。上林暁は左手の鉛筆書きで、つぎのように書いて寄越された。(44・10・15)の消し印で、

『風のごとく』 拝読、

小生にもけいけんあること心うたれました。鴉の歌が一番心に残りました。その次は、風のやうに泣く歌でした。あなたの一生のうたと思えました。

御精進下さい。十月十日」

この「あなたの一生のうた」ということは身に沁みだ。

歌仲間の中では、「病院の待合室に」の歌が一番評判がよかったが、「鴉のうた」は、上林選一位の歌として、忘れがたい。同じく「周囲明暗」(「短歌研究」47・10)一連を送ったときも、お葉書をくださった。吾娘はいま癒えつつありとさりげなく語りて内に不安わきをる

などの歌に対して上林暁は、(47・10・7)の消し印で、『周囲明暗』(中略)有りがとう。「明暗」は、むねに迫るものがありました。(後略)十月一日」とやはり、鉛筆書きの葉書であった。「むねに迫る」とは、迫力のあることばである。二通がどんなに激励を与えてくださったか、はかり知れない

四 小説「非行中学生」のモデルのこと

前文に引用した(44・10・15)の消し印のある葉書の「後略」としたところは、「金沢孝吉はあやまりで、孝吉が正しい。朝倉文雄はあやまりで、文夫が正しいとおもふ。十月一日」である。

この金沢孝吉は、わたしにも関係のある人であり、後年、わたしの関心をもった田村松魚の甥にあたる。松魚研究の拙文中に、とりあげてあり、それをお送りしていたのである。

上林暁の最晩年小説に「非行中学生」がある。(『半ドン』の記憶)所載)

「金沢さんの四股名は、小桜と言った。可愛らしい名前であった。有岡附近では彼は大関格であった。」「二月のある寒い晩、卒業試験の間に金沢さんは「櫃の木の下」をくぐった。中学生で登校したのは、空前絶後であら

う。」「この中学生は、旧制中学生である。」「ぼくの田舎の隣屋に、徳田守といふ青年があった。中大法科を出て、太平洋戦争で戦死した。妻の和子さんは四ヶ月で未亡人になった。

この人が生まれは有岡で、旧姓が金沢であることを知ったぼくは、金沢孝吉のこと。を思ひ出した。(中略)『金沢孝吉は、わたしの伯父です』と和子さんは答へた。(中略)『ずいぶん非行をしたさうですねえ』と和子さんはかからと笑った。」「

このモデルになっている金沢孝吉は、同じく上林暁の小説「中学一年生」にもモデルとして登場する。

医師であるわたしの父の代診をした人でもあり、父が土佐清水で開業をしていたころには私の家の離れに若い夫人と住んでいた。快男子であった。土佐清水へ父が住み始めたころに、祭りが何かで相撲大会が催された。孝吉おんちゃん(わたしはこう呼んでいた)に連れられて幼児のわたしは見物に出かけた。

相撲がたけなわになったとき、孝吉おんちゃんはわたしに衣類をあげて飛び入りで土俵へ上がって、何人も青年を投げとばした。町の人たちは、わたしの父と間違えたらしく、「今度この町に来た国見先生だ」と湧き立っていた。

また、小説の中に出てくる「和子さん」は、父母が世話をして縁組みをまとめた評判の美人で、本名和尾。孝吉おんちゃんの年少の従妹である。

わたしは昭和五十五年「海」に発表されたこの小説を読んで、こんな思い出を上林暁に書き送ったことだったが、本人はすでに葉書を書く力がなかつたらしく、妹の睦子から八月九日付けでお礼状が届いた。「お八ガキを読んであげると涙ぐんでいました」と書かれてあった。睦子さんにもいろいろとお世話さまになった。それから間もなく上林暁氏は亡くなられた。

五十五年八月二十八日であった。

さて、このように、上林暁の葉書を書き写し、思い出を書きつづけていると、追慕の気持ちと感謝の気持ちがこみあげてくる。

上林暁研究 第九号

二〇〇一年三月三十一日

園田学園女子大学(吉村研究室)より

第38回上林暁文学館企画展

内容 ～作家たちとの書簡交流から暁の人間像を見る～

期間 令和3年8月6日(金)から
令和3年10月31日(日)まで



初回展示 上林暁からの葉書 国見純生 【展示ケース内】